

# Death Educationによる人間教育

— 絵本の分析を通して —

## Humanistic Education Based on Death Education

— Through the analysis of picture books —

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

松田 智子

MATSUDA Tomoko

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：死生観，死の教育，絵本

**Abstract** : The view of life and death changes as time goes by. Therefore, it has been said that death education is needed. This is why modern life holds the increase of suicides, diversification of understanding death and a long-term fear to death by medical development. In Japan, however, the need of death education is not recognized in society, and death education does not readily carry it out in school. Then, this paper focuses on the role of children's picture books about death education. Picture books of death education for infants and pupils should apply their developmental stages. In addition, each child's view of life and death, and experience should be considered in class. This paper examined 9 picture books for the achievement of Alhons Deeken's basic 5 rules of death education.

**Keyword** : the view of life and death, death education, picture books

### 1 死生観の変遷

人が死について考え始めたのは、宇宙と生命の存在について気付いた時だと言われている。最初、人類は宇宙の動きについては、太陽や月が動いて満ち欠けすることを通して実感していた。それらは1日や29日ごとに動き変化をして、また同じ場所に現れる。星は1夜のうちに、その位置を変えるが、北極星だけは動かない。かつてエジプトの王の墓であるピラミッドには、常に一定の場所に現れる北極星は不変の象徴として描かれていた。また、夜に沈んでもまた昇る太陽や、29日の周期で満ち欠けを繰り返す月等も不変の象徴と

して描かれていた。ピラミッドには北極星の光と年2回春分と秋分ごとに同じ角度で太陽の光が、神殿の奥深くまで差し込むように設計されていた。

人類は、このような大自然である宇宙の姿を通して変化するものと不変のものを意識し、自らの死を意識するようになったのではないだろうか。つまり地球上における人類は、自らの生命も、このような宇宙の存在の一部であり、大自然の一部として存在すると考えていたのだろう。その生存の実態は他の動物のそれと、大きく変わることはないと思われていたのだろう。

しかし長い年月が経過して、人類の歴史上に宗教が登場して、多くの人々が宗教を語り、それが広く普及

していく中で、宗教以前の死生観は変化をしていった。宗教が普及する過程では、エジプトのような死生観も混在をしていたに違いない。けれども、偉大な力＝神の存在が、人類が思考する原点に大きな影響を与えることになり、人間を含むすべての生命や宇宙の存在自体も神の力に左右されるようになった。ユダヤ教、ヒンドゥー教、キリスト教、マホメット教など、現在も影響をもつ主な宗教の多くは、多神教であれ一神教であれ、人間の存在や宇宙の存在も、基本的に神である偉大な力に支配されていると考えられている。

宗教の全盛の時代以降しばらく時が経過し、現在の人々の死生観は、社会の価値観とともに多様化しているように思われる。多様化の要因の一つに、宇宙自体をも動かしているとされた神の存在、宗教のよりどころが否定されてきたことが挙げられる。デカルトの「私は疑う、そこで私は考える、だから私は存在する」という認識法を、自己存在の認識法と捉えるならば、これは神の偉大な力の存在を抜きにした、生命の存在を主張していることとなる。

これについて竹内はさらに詳しく述べている<sup>(1)</sup>。

デカルトの流れを汲むショーペンハウアーが『意志と表象としての世界』(1819)の補講として晩年に書いた『パレンガ・ウント・パラリオオーメテ』(1951)では宗教の世界においてはタブーであった自殺について述べている。「…死は個体の終末なのである。ほかならぬこの個体の死を我々は個体が全く失われてしまったという感情のもとに、かくも嘆いているのであるが、もともと個体は単なる(物質の)結びつきにすぎなかったのであるから、それは取り返すすべもなく過ぎ去っていくものである」さらに「…死は我々にあまりにも必要な避難場所であって、坊主どもの命令などで我々から取り去られるものでない」とまで言って、神という「偉大な力」であらゆるものを理解追求しようという考えをストップさせ、それまでの宗教家の意図を非難した。

筆者は、この理論は、現在の人々の死生観に一定の影響を与えていると考える。このように死生観は行きつ戻りつしながら、さらに多様化に向かっているのだろう。

## 2 現代日本における Death Education

### (1) 自殺者の増加

前に述べた死生観の多様化の流れのなかに、日本人の死生観も組み込まれている。日本においては1998年以降に突然に増加した自殺者の数は、死ぬこと自体までもが、個人の自由な権利であるにとらえる風潮を現わしていると筆者は考える。内閣府が発表した日本の「平成23年度の自殺者数」は、世界保健機構(WHO: World Health Organization)の資料によるとインド、ロシア、アメリカについて世界の4位である。もちろん自殺者数の増加の要因は死生観の変化だけではないだろう。病気や人生への絶望、経済的事情、いじめによるストレスや欲求不満、テレビやゲームでの仮想死の氾濫などの社会的要因または心理的な要因が存在することも考慮しなければいけないが、筆者は日本人の死生観の変化も、その底流で一因となっていると考える。

### (2) 生命尊重を指導する学校教育

日本では生命の尊重については、学校園の教育活動全体を通して行うことになっているが、直接的には道徳の時間が多く使われている。幼稚園では道徳の時間はないが幼稚園教育要領の5領域の中に「道徳的な芽生えを培う」「自分の体を大切にする」「規範意識の芽生え」などの内容で随所に示され、いのちを大切にす教育が行われている。小学校では道徳の全学年の項目において、3-(1)に生命尊重が位置付けられ、授業が行われている。その内容は、死と直接向かい合いそれについて思索することではなく、生きる方面に焦点を当て、その素晴らしさを実感させるという方向である。死からスタートして生を模索するアプローチ、いのち賛歌からのアプローチ、この両者はアプローチの方法は異なっているが、それらの目指すところは共通して生命尊重である。しかし現実の学校の道徳の授業には、前者はほとんどなく、後者が多い傾向にある。

このようなアプローチ方法の偏りは、日本における子どもに対するDeath Education(死への準備教育)について、人々の間に以下のような考えが存在するからだろう。

1つは輝く未来ある子どもにはいのちの素晴らしさを教えるべきで、暗いイメージのともなう死を教える必要はないという考え方、次に人生経験が浅い子ども

が死について理解するのは不可能ではないかという意見である。そして最後に、仮に前述した2つのことが解決しても、教える側が死というものについて自覚し、すなわち自らの死生観、さらには確たる人間観を持っていなければ、教えることができないとする意見である。つまり日本の教師の現状からすると、子どもに死を教えるのは手に余るというのである。

Education という名称の行為、教育的な側面から見るとこのような主張は、正しい部分もあるかもしれない。しかし、筆者は、我々大人の多くがこの教育の本質を十分理解していないゆえに、このような意見が出ると考える。確かに各学校での教科教育の指導では、教師が子どもよりその内容を深く理解し、その教育方法技術を身に付けていることが当然であると考えられている。

はたして Death Education (死への準備教育) に関する指導についても、同様のことが求められるのだろうか。死についての事柄は、一部の熟達した宗教関係者を除き、教えるプロである教師といえども、死を完璧に理解することは難しいだろう。確固たる死生観や生き方も含め、現状では多くの教師が、子どもに死について教育する自信を備えていないだろうと推測する。なぜなら、私たち日本人は、生や死について、これが正解であるという絶対的な考えを持つことができないような混沌とした環境で生きているからである。また、教師だけでなく多くの日本人が、過去の自分自身が経験した学校教育の中で Death Education (死への準備教育) を指導されたことがないからである。

ただし、私たちは戦時中のある一時期は、生命尊重とかけ離れた偏向性の強いマイナスの Death Education (死への準備教育) を、国家規模で受けていた経験がある。この過去のマイナスイメージが、このような教育にある種の拒絶反応を引き起こしているのかもしれないと筆者は思う。

しかしながら、筆者は上記のような理由で、この教育を排除するのは、間違っていると考える。なぜなら現在の子どもが置かれている少子・高齢化に伴う核家族化、さらに過度な情報化による人間疎外という生命賛歌と逆の社会的環境で、子どもたちが生存せざるを得ないからである。さらにこの教育は、未知の死を学ぶだけでなく、教師と子どもがともに一人ひとりの人生の終わり方、つまり生き方を考える時間であると確

信するからである。

### 3 Death Education (死への準備教育) の必要性

上記のように Death Education (死への準備教育) を実践するうえで、教師や学校園に戸惑いがあることは事実である。それにもかかわらず、筆者が考えるこの教育の必要性を以下に述べる。

#### (1) なぜ今、必要なのか

20 世紀に入って、人類は多くの国が関係する大きな戦争を、何度も体験した。日本は第 2 次世界大戦後、冷戦といわれる世界の枠組みの中の一部として生き残り、国外の地域の紛争や戦争に大きな影響を受けてきたが、日本は国土における直接的な戦争を経験していない。一見このような平和な時代が長く続くとともに、延命のための医療技術が革新的な進歩を遂げたことは、人類にとっても喜ばしいことである。しかし一方で、重い病にかかった多くの人々が、病院で様々な計器に囲まれ生き続け、最期の時を迎えるようになったのも事実である。最期の時を迎えているときでさえ、延命治療の為に家族が病人から引き離されることもある。このような科学医療万能への信仰が長く続くにつれて、現代医療は人間疎外の傾向を深めていった。死は私たちの日常から離れ、病院の中に閉じ込められ、タブー視されていくこととなった。

日本では 1951 年は約 85% の人が自宅で家族に見守られ死を迎えていたが、1975 年に病院死と自宅死が同数になった。そして 2004 年には病院死が自宅死の約 5 倍になった (厚生省の人口動静統計)。身近に死と接する機会が減り人々の死への意識はさらに低くなっていった。この悪循環が私たちが死について思索し、自己の死生観を養うことを一層遠ざけてきたといえる。現代の医療者たちの間でも尊厳死に関わる場面等で、延命や治療の在り方に対して問い直しが起きていることは、歓迎すべきことがらであると考えられる。

また厚生労働省の統計によると、最近は大きな死因の一つに悪性新生物 (癌) が挙げられている。だが、医療の進歩に伴いその進行を遅らせることが可能となり、比較的長期に子どもの患者や家族が「死の恐怖」と向き合わなければならなくなった。この「死の恐怖」を緩和するためにも Death Education (死への準備教育)

は求められている。

人類がこの世に誕生した瞬間から、死は私たちの傍らに確実に存在していた。そして人類は、死という現象に対し畏敬の念を持って向き合ってきたことは、過去の埋葬の遺跡などで明らかになっている。人は生まれると必ず成長し、やがて生命の終焉を迎えるという変化の中に、自分自身も置かれていることを、家族の誕生や死の体験を通して気付いていたからであろう。

## (2) 日本人の死生観

日本人の死生観の歴史について、振り返ってみよう。かつての日本人の死生観は良い意味でも悪い意味においても、家族や地域においてしっかりと培われていた。いわゆる死生学という学問への取り組みは、西洋からはかに遅れていたが、仏教に根ざした輪廻転生の思想や、あらゆる自然現象の中に祖霊の存在を信じ、それらを大切に祭る習慣が全国各地に見られた。今日のように都市化と核家族化が進む以前は、ほとんどの日本人は自宅で生まれて自宅で死を迎えていた。いのちの始まりを家族や親せきや地域の人々一同で迎え、その最期を看取るのは、どこの家庭でも当然のことであった。いのちの誕生との出会いが「いのちを大切に教育」となり、死の看取りが「死への準備教育」の大切な学びの機会となっていたといえる。

現代日本では、死に対する人々の受け止め方は多様化している。これは東西の冷戦が終結し、画一的な社会の崩壊した後、自立した自己の存在をどのように確立するかと悩む人々が増加していることとも関係している。このように悩める時代の人類は、人生の根源的な課題である生と死の問題について考えることなく通れない現実と向き合っていることになる。人はやがて自分自身に必ず訪れる死と向き合うことにより、自分に与えられた時間が有限であるという現実を再認識することができる。それを契機に、今ここにある「いのち」をどのように生きるかを考え始めることになる。つまり Death Education (死への準備教育) は、まさに Life Education (生への準備教育) と言い換えることができる。

## 4 Death Education と絵本

本稿では Death Education (死への準備教育) の対象

として幼児期及び児童期に焦点を当てているため、教材として絵本を採り上げることとする。アルフォンス・デーケン(A. Däken)は、この教育の目標として15項目を提示しているが、本稿では基本的な1~5項目までを幼児・児童に直接的に関わる内容と捉え、項目ごとに発達段階に合った絵本を紹介することとする。

### (1) 目標1に対応する絵本

死のプロセスならびに死に行く人の抱える多様な問題とニーズについての理解を促し、それにより人生の最期である人に対し、よりよい援助を提唱できることが第一の目標である。

これに対応する絵本として、筆者はマーガレット・ワイルド(Margaret Wild)文、アン・スパッドビラス(Anne Spudvilas)絵の『ジョニー・エンジェル』を紹介する<sup>(2)</sup>。この作品は姉ジェニーが、死が迫った弟デビットの願いを受け入れ、懸命に援助する姿とともに、ジェニー自身も弟の死を受け入れる過程のグリーフケアが克明に描かれている。

ジェニーの不安な重い心理を紫の色調で、一抹の希望を、黄色を中心とした暖色で表現している。透明感があり印象派を思わせる色使いである。ジェニーを中心とした人々の日常生活がアップで描かれ、その表情が読み手に静かに迫ってくる。弟の死を受け入れることができないジェニーは、古びた茶色の大人用のレインコートを身に付け、決してそれを脱ぐことはない。レインコートの中に想像の天使の羽を隠しているのは、死を迎える弟を守るためである。弟の死を認めないという抵抗のシンボルであるレインコートを、家族や友達や先生が何事もないように淡々と受け入れていることが、ジェニーの今にも切れそうな心の細い糸を支えているのだろう。ジェニーはレインコートに身を包むことにより、やがて訪れる大きな危機に備えて、エネルギーを蓄えていると解釈できる。ついに弟は亡くなり、葬式の日ジェニーは古びたレインコートを脱いだ。大きな危機に直面したジェニーは、レインコートによりエネルギーを蓄え、現実の弟の死と向き合うことができたに違いない。最後に母親とともに古いレインコートを羽織り、屋根の上で肩を寄せ合う2人の姿が、それを物語っている。

次に視点を変えて、ジェニーの行動を死に行く者への援助という面から検討をしてみよう。ジェニーは学

校のことや外の世界の出来事を、弟のベッドで一緒に丸くなって寄り添い宿題もそっちのけで声がかかるまで、毎晩デイビーに語りかける。彼がやっと満足して、またベッドにぐったりと横になるまで、そっと弟の手と自分の手を合わせながら話し続ける。しかしデイビーは、もう片手で空に放り上げられそうなくらい軽くなり、もう何も尋ねなくなった。ジェニーの背中にも触ることもなくなった。ジェニーはそれから何日も学校を休み、デイビーのそばにいた。

死に行く人を援助する際の求められる振る舞いとして次の2つが求められるそうである。一つは心の平穏を増すための手助けをすることと、もう一つは患者の願いをかなえてあげることである。

死に直面する弟のデイビーの恐怖を緩和し、希望を持って生活をさせるためジェニーは古びたレインコートの力を借り、天使となり弟にかすかな希望を持続させようとしていた。ベッドでの生活を送る彼の願いは、学校のことや外の世界の出来事に以前のように触れることであった。もう一度友達と遊びたい、外の空気に触れたい、これらは健康であれば当然のようにできることであった。ジェニーは時々先生のお使いで教室を出ると、弟のクラスを覗き込み、その場の様子や雰囲気の詳細に記憶し、デイビーに話して聞かせていた。一緒にベッドに座り、たがいに向き合って手振り身振りたっぷりに話してきかせる姉、それをじっと食い入るように見つめる弟、2人の中には穏やかな明かりがともっている。絵本の見開きの中心に詞とともに2人の姿がぼっと描かれていて、時間と空間が止まっているようだ。

筆者は、古びたレインコートは2つの存在意味を象徴していると考えた。姉ジェニーにとっては危機を回避する抵抗の証であり、弟デイビーにとっては死の恐怖を緩和させる希望であったのではないだろうか。

## (2) 目標2に対応する絵本

2つめの目標として、生涯を通して自分自身の死を準備し、自分のかげがえのない命を全うできるように、死について深い思索を促すこととデーケンが述べている。人間にとり死は絶対に避けては通ることができない現実であり、死は誰にでも必ず訪れるものである。実存主義哲学では、我々と死は結ばれており、人間の尊厳はいかに生きるか、そしていかに死ぬかと思案し、

それを実現するところにあると言われている。そのためには日頃から死について学ぶなどの死の準備教育が必要となる。筆者は、幼児や児童が、死について学ぶことに抵抗を感じる人が存在することは認めるが、最近幼児・児童を対象にした死について考えさせる優れた絵本も出版されているので、その活用を期待する。

次にDeath Education（死への準備教育）に早期から取り組まれていた国（ドイツとイギリス）と日本の絵本を比較しつつ分析することにする。

### ①日本の絵本

谷川俊太郎文、かるべめぐみ絵『考える絵本シリーズ「死」』を紹介する<sup>(3)</sup>。この絵本は子どもの周りの事象に焦点を当てて、その仕組みや形を、子どもに分かりやすい表現で伝える認識絵本である。谷川は絵本制作にあたり「カラダが死ねば本当に人間は終わりなのか、それともカラダがなくなった後もタマシイ（と呼ぶべき）は存在し続けるのかという、左脳でいくら考えても答えは出ない問いかけに、考えた末に信じることで得られる仮のイメージを子どもたちに提案した」と述べている。

絵本は少年が、祖父の死に遭遇する場面から始まる。薄暗い部屋に横たわる祖父は寝ているようだけど、呼んでも応えない。触るとすごく冷たく、怖くなる。祖父はもう祖父でないのだろうか少年は戸惑う。少年が祖父のカラダを通して、生まれて初めて死に触れた瞬間だ。それは物語や映画で見る3人称の死と全く異なったものであり、少年の五感に直接に響く死の体験であった。祖父のカラダは灰になったけれども、どこかに存在するのではないかと、少年は悩む。大人に尋ねても本で調べても正解は見つからない。少年はその後も祖父の写真やビデオの声に触れて、自分のココロが動くのに気付く。そして眼に見えなくても存在する力があり、カラダは物質だけどタマシイはエネルギーだと考えついた。遠い遠い昔、ビッグバンの瞬間にエネルギーから物質が生まれたとしたら、死は物質から自由になりエネルギーになることかもしれないと少年は納得した。

このような思想は、ギリシア以前の世界では多く見られた死生観であると言われている。竹下は「中国にある『気』やインドの『曼荼羅』などが人体内部の不思議な生命力と同じように鉱物質的な宇宙にも生命の

息吹という存在を認めようとする」と述べている。さらに「人間には特に魂というような生命の存在を認め、死については魂の宿る一時的な物質的乗り物である肉体の、変化あるいは減少と捉えるありかたが成立し、かなり長い間定着した」と指摘している。この絵本は、古代宇宙認識に基づく、アジア型死生観を基本としていると、筆者は考える。

## ②ドイツの絵本

Death Education（死の準備教育）の先進国であり、デーケンの母国であるドイツの絵本を紹介する。ヘルメ・ハイネ（Helme Heine）文・絵『ぞうのさんすう』である<sup>(4)</sup>。この話は、日本では6年生の国語の教科書に掲載されたことがある。絵本が日本に最初に紹介された時は、北杜生訳『ぞうのだんご』であった。

黒と白のコントラストが際立った、デザイン化された絵で描かれている。象はまるでスタンプで押されたように同じ形が繰り返し登場するが、温かみのあるやわらかい線で描かれている。1頭の象が生まれてから死ぬまでの100年の様子や気持ちを、うんちの数で表している。100年生きてみて分かることがある、生きる時間について象と一緒に考えるシンプルな絵本である。

小さい象はたくさん草を食べて水を飲んでうんちをする。誕生日ごとにうんちの数が、一つずつ増えていく。生きるということは食べて寝ること、うんちの数が増えることは成長することだと分かり、この繰り返しの表現が子どもに好まれる。うんちが増えるたびに象は大喜びし、象の体は大きくなっていく。50年経過し、毎日50個のうんちが出て、総数を数えることができるくらい成長した。しかし、次の誕生日に不思議なことにうんちが一つ減って、食べる量も減っていった。何年もたち象はしわだらけになっていった。とうとう最後の1個のうんちが出なくなる日が来た。「ぞうはまちました。じっと たったまま まちました。でもうんちは できませんでした。」右、左、前、後を向きながら、うんちを待つ象が、見開きいっぱい8頭も描かれている。始めの50年間で456375個のうんち、残りの50年間で456375個のうんち、差し引きゼロ。100年生きてみてやっとゼロの意味が分かった。もう考えることは何もない。「ぞうが むかったのは うんちをしなくなった ぞうがいくところでした。そこで

ぞうもゼロになり しずかに きえていくのです。」と結ばれている。最後のページには去っていく象の大きなおしりが、小さな点になるまで遠近法で何頭も描かれている。象の後ろ姿に、自らの終末を重ねる人もいるだろう。

ドイツの有名な哲学者マルティン・ハイデガーは人間を「死への存在」と定義した。象は50歳というターニングポイントから死を自覚しつつ歩み続けている。絵本の中に「ぞうは しあわせでした」という言葉が3回出てくる。1回目は象が50歳の全盛期、2回目はうんちが減ることが死に近づくことだと納得した時、3回目は最後のうんちが出なくて自らがゼロになる直前である。まさに象は生きたように死ぬのである。筆者は、この絵本を読んだ後、ある種の哲学書を読んだような錯覚に襲われた。ドイツのDeath Educationの絵本は、死について子どもたちに思索の刺激を与えるという考えに基づいて編集されている。

## ③イギリスの絵本

世界的にも有名なスーザン・バーレイ（Susan Varley）文・絵の『わすれられないおくりもの』を紹介する<sup>(5)</sup>。死や老いの絵本は多く見られるが、これは老いて最期を迎える側、そして残された側の双方から描かれたものとして注目される。多くの動物が生活する森の中に、長老格の何でも知っているアナグマがいた。アナグマは歳をとり自分の死が近いことを感じる。ある寒い夜、アナグマは動物たちに「長い トンネルの むこうに いくよ さようなら」と手紙を残して一人で死を迎える。アナグマが夢の中で一人でトンネルを走っているうちに足に力強さがよみがえり、ふっと地面から浮きあがったように感じると、すっかり自由になったという死の描写がある。これは読み手に、アナグマの死を頭だけでなく身体的な感覚でより実感させることになる。死を迎える者の心情をこのように描いた絵本は少ない。

アナグマの死を動物たちは大変悲しむが、春の訪れとともに、自分たちの思い出の中に生きるアナグマの存在に気付くようになる。アナグマが動物たちに残したおくりものは、品物ではなく動物たちが豊かに生きるための知恵と工夫であり、日常生活にしみ込んだものだと気付くのである。

この本は、幼い子どもに肉親の死を伝える際に、読

み聞かせに使われることが多いそうであるが、十分に納得できる。幾重にも重ねられたはっきりとした線描と、ペンのタッチが残るように淡く彩色されている。アナグマの黒いしま模様にもペンで毛の感じが残され、モグラも線の重なりで柔らかさが表現されている。その上に薄く重ねられた淡い色彩が生み出す強弱は、おだやかであたたかな印象でありながら、しっかりとしたものを感じる。

最後のページでは、モグラが「ありがとう アナグマさん」と淡いピンクの空に呼びかける。こんなふうには死がやってきて、自分の暮らした場所で、眠るように夢を見るように死の世界に行くことができるなら、死ぬこともそれほど怖くないことだと筆者には感じられた。

### (3) 目標3に対応する絵本

身近な人の死により体験する悲観とそのプロセスの難しさ、それからの立ち直りである悲嘆教育(グリーフ・エデュケーション)を行うことを、デーケン(Deeken)は3つ目の目標に挙げている。筆者は、この目標は現代社会における幼児・児童にとっては最も必要とされる目標であると考えている。なぜなら子どもにとっての試練は、自分の死に直面することが最大のものであるが、これは一生に一度だけである。しかし自然災害国である日本において、突然に肉親の死に出会うこと、愛する人の死を体験または予期することは、たびたび起こる可能性があるからである。

デーケンも、悲嘆教育は、Death Education(死への準備教育)の大切な一領域であると述べており、特に死別体験者の援助を重視するべきであると主張している。

筆者は阪神淡路大震災の被災者であるが、世界有数の地震大国日本では、病気だけでなく自然災害で愛する者の突然の死と向き合わなければならない機会が比較的多い。震災の死別体験者としての筆者は、以下のような善意によるコミュニケーションを避けてほしいと願う。

#### a「頑張ろうね」

子どもたちは口先の励ましに対して、敏感に拒絶反応を示していた。

#### b「泣いてばかりいても亡くなった人は喜ばない」

日本では男児の教育に使われがちな言葉である。泣

き涙を流すことにより、死への拒絶反応を緩和し、死を受け入れることができる。葬儀で共に泣くことを仕事とする文化が存在する国もあるぐらいだから、泣くことは悲嘆教育には有効である。

#### c「早く元気になってね」

肉親や愛する人を失った悲嘆を乗り越えるには、一人ひとりのプロセスがあり、時間が必要である。

#### d「あなたの悲しみが理解できるわ」

喪失体験は個々のものである。教員は、子どもを励ますのにこの言葉を使用しがちであるが、慎みたいものである。

#### e「辛いのはあなただけじゃない、まだましかも」

悲嘆の深さは個々に異なり、他の人と比較するものではない。大震災後に同じような被災者が表出する悲嘆が様々なことを見れば明らかである。

#### f「やがて、時間が解決するから」

これは一見真実のように思えるが、だまされてはいけない。喪失体験は個人的なもので、すべてが時間が癒すとは限らない。松谷みよこ作詩『いもうと』にその心情が表れている。

上記の言葉の多くは、善意の慰めとして使用される場合が多い。筆者は、大人の日常経験から、喪失体験者を支援する際に、安易に言葉に頼りがちの傾向があることを感じている。だが、相手が幼児・児童の場合は言葉による表現に十分対応できないため、慎むべきである。ただ一緒に静かに傍に座り、相手の話に耳を傾けひたすら受け止める態度が大切であると考えている。先に紹介した絵本『ジェニー・エンジェル』のジェニーの周りの人々の振る舞いを思い出してほしい。

次に、悲嘆教育に有効な絵本を2冊紹介する。第一はイギリス絵本で、ジョン・バーニガン(John Burninbham)文・絵『おじいちゃん』である<sup>(6)</sup>。おじいちゃんと孫娘が春に再会し、1年を共に過ごす物語である。孫娘は空想世界に入り、おじいちゃんは思い出の世界にいる。この2人の会話がかみ合っていないが、それがかえって深みをかもしだしている。温室でおじいちゃんは「これが みんな そだったらはいりきらんかな」と独り言をいうが、孫娘は「むしもてんごくにいくの」と尋ねる。これはこの後の、祖父の隠喩とも感じる。2人は、ままごと、海水浴、釣り、スケートと一緒に空間を過ごすなかで、別々の世界に

居ながら心を通わせていく。

詞は2人の会話のみである。見開き右側の淡いカラーページは2人の現実世界を、左側のセピア色の単色ページは会話に出てくる空想や追想の世界を表現している。カラーとモノクロのページがほぼ交互に現れる構成が、独特の効果をもたらしている。2人が共有する現実と空想や追想の世界を行き来しながら、物語は深まり広がっていく。終盤、空っぽの肘掛椅子を、孫娘がじっと見つめている。主人がいない肘掛け椅子をじっと見つめる孫娘の姿は、見開き左に細く震える線で描かれており、今にも、消え入りそうである。そのページで唯一色彩を与えられた、主のいない緑色の肘掛椅子は、おじいちゃんが亡くなったことを黙って物語っているようだ。

しかし次のページをめくると、突然に少し髪が伸びた孫娘が、海の見える丘を登るように、勢いよくベビーカーを押して疾走する姿が登場する。おじいちゃんの死については、全く語られていないので、結末の受け止めは読者にまかされている。この本はオープンエンドであり、大きな物語の展開はなく、登場人物は飄々としているだけに、死の意味をゆったりと子どもとともに考えるのに適していると筆者は考える。

人は親しい人が亡くなった場合、ほとんどの人が罪の意識を抱くそうである。もし、あの時こうしてあげていたら、死ななかったかも」「あの時、あんなこと言ったから、悲しみのまま逝ってしまった」等の罪意識は、遺族がたどる正常な悲嘆のプロセスである。Death Educationのカナダの演習には「空っぽの椅子」というのがある。この演習では亡くなった人がいつも座っていた椅子を相手にして、部屋の中で一人で向き合っただけで座るそうだ。そして亡き人が座っている姿を想像しながら、相手に自分の気持ちを伝え、お互いに許しあうという演習だそうである。筆者は、終盤の孫娘がおじいちゃんの肘掛椅子を見つめる場面は、この許しと癒しを象徴していると考えられる。

もう一つの絵本は、ディック・ブルーナー (Dick Bruna) 文・絵のうさこちゃんシリーズの『だいすきなおばあちゃん』である<sup>(7)</sup>。最初のページからうさこちゃんがぼろぼろと涙を流す。「だいすきなおばあちゃんがしんでしまったのです。」と始まる。うさこちゃんは、おじいちゃんが大きな涙を流すのを初めて見た。お父さん、お母さん、おばさん、誰もが大きな涙を流

している。当然のように家族や知人全員が、大粒の涙を流しながらお別れをする。最後は大きな大きな森の中で「うさこちゃんは おはかのまえて だいすきなおばあちゃん、と、よびかけます。すると、おばあちゃんが ちゃんと きいてくれているのが わかります。」と終わる。このシリーズは誕生してから半世紀以上が経過し、人々に親しまれてきた。正面を向くうさこちゃんと向き合うと、ほっとする不思議な気持ちになる人も多いだろう。黒い輪郭線は筆で描かれ、均一でなくゆがみがある。作者の様々な感情が、その線を通して伝わってくる。赤・黄・緑・青などメインの6色以外の色彩はなく登場人物はデザイン化されたシンプルな形で、鮮やかな単色で彩色されている。登場人物の顔は同じパーツの組み合わせで一見無表情に見える造形であるが、これが幼児には感情移入しやすいようだ。あらすじもシンプルで内容が分かりやすく、幼児が初めて出会う Death Education (死への準備教育) の優れた絵本であると考えられる。

筆者は、喪失体験そのものは幼児・児童にとって厳しいものだが、それから学ぶことも多いと考える。幼児・児童の喪失体験を扱った絵本は少なくないので、大いに活用すべきであるが、その際には画一的でなく、個別の喪失体験を幼児・児童の人間成長の糧にできるように期待する。

#### (4) 目標4に対応する絵本

4つ目の目標は、死への極端な恐怖を和らげ、無用の心理的負担を取り除くことである。誰もが感じる様々な死への恐怖を分析・検討し、死への過剰な恐怖をノーマルなレベルまで緩和することは大切な、亡くなる幼児・児童にとり大切なことである。特に患者が子どもである場合、死という現実を受け止めることができないという大人側の理由で、子どもに自分自身の病状を知らされないことは、悲劇の原因となることもある。

子どもが抱く死への恐怖を緩和する絵本として、筆者は次の絵本を勧めたい。それは、ブライアン・メロニー (Bryan Mellonie) 文、ロバート・イングペン (Robert Ingpen) 絵の『いのちの時間一命の大切さをわかちあうために』である<sup>(8)</sup>。絵が蟻の足の小さな棘まで写実的に描かれるなど、その図鑑のような緻密な迫力画が子どもの心を捉える。見開き左に大きく動物や植物が描かれて、その右にはそれぞれの短い命のありようが



語られている。表紙をめくると、左側に生まれたばかりの卵が2つ巣とともに描かれ、右側に「いのちにははじまりとおわりがあって、その間を“生きている”という」と定義が述べられている。次の見開きは砕けた貝がら、大きな赤い熱帯魚、足の折れた蟻、蟹、羽がもがれ崩れた蝶、生い茂る植物と展開していき、そして最後に人間、少年が登場する。終わりには古びた時計の絵とともに「長くても短くてもいのちの時間にかわりはない。はじまりがあっておわりがあり その間には“生きている時間”が満ちている。」と初めの定義にぐるりと戻っていく仕掛けになっている。精密なごまかしのない絵と淡々とした語り口の文章が、死とは何かと大上段にかまえることなく、子どもの心にとんと落ち、納得できる絵本である。

かつてアメリカのマイケルという5歳のエイズ末期少年が、ホスピスの医療従事者により、絵本『いのちの時間』を読み聞かせてもらっていたそうである。

#### (5) 目標5に対応する絵本

5番目の目標は、死にまつわるタブーを取り除くことである。死について自由に考え話すことにより、死に結びついた情緒的な問題の解決も可能にする。

最近の絵本では、悪者が殺されたりする場面は残酷として、本来の話を歪曲してまでハッピーエンドで終わる作品が増えている。また、絵本には人間の自然死の場面を描写した「臨終の場面」は、ほとんど見られない。これらも死にまつわるタブーを避けている現象の一つであると筆者は考える。

まず、死と真正面から向き合い考えさせる認識絵本を紹介する。ローリー・クラスニー・ブラウン (Laurene Krasny Brown) 文、マーク・ブラウン (Marc Brown) 絵の『「死」って、なに？—考えよう命のたいせつさ—』である<sup>(9)</sup>。子どもが死という現実と直面した時、うそをついたり隠したりせずに、その疑問に真正面から答え、話し合うために死生観の多様性を前面に出して制作されている。ユーモラスな恐竜の家族が様々な死に出会い、悩みつつ絵本は展開する。絵は明るい色調で小さな枠内でも細部まで丁寧に描かれているので、子どもが何度も飽きずに見直し読み返しすることができ、その度に新しい気付きが期待できそうである。それぞれの見開きは細かい枠に区切られ、枠ごとに多様な価値が描かれている。まず見開き1ページ目は、恐竜世

界の平和な公園での日常場面が展開する。次をめくると、「なぜ人は死ぬの」という問いに答えるように、様々な病気・交通事故・戦争・自殺・老衰等の死因場面が示される。その後「死ぬってどうゆうこと」と展開していく。そして、喪失体験を乗り越えるさまざまな悲嘆教育が、具体的な会話形式で描かれているので、子どもも理解しやすい。最近の日本では死者を弔うことの意義が薄れる傾向にあるが、ここで葬儀の意味を宗教別に取り上げている。「しんだらどうなるの?」とさらに問いが続くが、ここでも正解は示されず多様性が主張される。最後は「大好きな人が死んでも、やがては友達ができて、新しいことを覚えたりすると忙しくなることでしょう。だからといって、それは死んだ人を忘れることではありません。今を楽しく生きることこそ、死んだ人が一番望んでいることですから」と子どもたちへのメッセージで終わる。

この絵本は、お話し仕立てでなく、子どもの素朴な疑問や悲しみを掘り起こす役割を果たしている。また、特定の価値を押し付けず、ユーモラスな恐竜へと同化しやすく、子どもに死を恐れさせず死の意味を考えさせることができると筆者は考える。

次に死の不可逆性について語る絵本を紹介する。子どもが死の不可逆を理解するのは、かつてから小学校低学年程度と言われている。ミスカ・マイルズ (Miska Miles) 文、ピーター・パーノール (Peter Parnall) 絵、『アニーとおばあちゃん』である<sup>(10)</sup>。ナバホ・インディアン少女アニーは、父と母と年老いた祖母と砂漠のホーガンで暮らしている。アニーの一番の楽しみは、毎晩祖母が話してくれる昔話だった。祖母はある日、家族を集めて「今織っている絨毯が出来上がるころには、私は母なる大地に帰っていく」と静かに告げる。震えるアニーを前に、祖母は家族への形見分けも終えた。アニーは祖母の死の時を延ばすために、あれこれ画策するがうまくいかない。ついにアニーは、夜にこっそりと織り機の糸を抜いて元へ戻したが、祖母に止められる。祖母は空と砂漠の会おうはるかかなたを眺めて、アニーに「おまえは、時間をもどそうとしているんだね。それはできないんだよ。」と、続けて「お日様は、朝、大地からのぼり、夕方、大地に沈んでいく。生きているものはすべて、大地から生まれて、大地に帰っていくんだよ。」と話す。自然の摂理を受け入れたアニーは、祖母から譲られたスティックを手にして、

自ら絨毯を織り始める。アニーの葛藤を乗り越えた姿が凜として美しい。アメリカの荒涼とした砂漠が白黒で描かれている。色彩は黄・茶色系の枯れた大地をイメージさせるものだけである。登場人物に色はない。実りを表す黄色いかぼちゃと茶系の大地、アニーのかぶる毛布だけに色が見られる。登場人物の表情には大きな喜怒哀楽はなく、自然を前に定められた運命を生きている。ナバホ・インディアンの人生観・自然観を通して、死とは何かを問いかける絵本である。

## 5 死をテーマとした絵本

絵本は時代や国境を越えて、子どもから高齢者までが楽しむことができる芸術作品である。絵本は絵（視覚表現）と詞（言語表現）で構成されるという絵本独自の表現を持っている。絵と言葉がお互いに補完し合っており、向かい合ったページが同時に提示され、ページをめくるたびにドラマが展開される。

ここでは Death Education（死への準備教育）に絵本が果たす役割を検証する。死について思索したり喪失体験や葛藤をしたりすることは、子どもの自立や自己・自己形成に大きく影響を与えている。筆者は、子どもが自立し自己を形成するには自分の内面をみつめ、自分自身と対話することが不可欠であると考える。

佐々木は、絵本のデータベースを作成し、絵本を心理学的な視点で分類している。その中で「子どもが自己と対話する」という主題を取り上げて、子どもたちがどのような環境や条件のもとで自分に気づき、自己対話を始めるかを考察している。佐々木は「自己と対話する」ことが主題となる 96 冊もの絵本に含まれる内容のキーワードを丹念に考察し、以下のように 4 分野があることを発見した<sup>(11)</sup>。

- ①ぬいぐるみ・秘密の友達との対話
- ②様々な葛藤、悩み、挫折が新たな「自己」を生み出し、既存の自己との対話を促す
- ③自然が生み出す様々な物と静かに語り合う、または自然との融合体験を通して自らと対話する
- ④子どもが一人で過ごす時間

筆者が選択した Death Education（死への準備教育）の絵本を佐々木の分類で整理しなおすと、次のようにな

る。『ジェニー・エンジェル』は②、『考える絵本シリーズ「死』』は②、『ぞうのさんすう』は②と④、『わすれられない おくりもの』は②、『おじいちゃん』は②と④、『だいすきなおばあちゃん』は①、『いのちの時間』は③、『「死」って、なに？—考えよう命のたいせつさ—』は②、『アニーとおばあちゃん』は②と③である。

②が多いことは、自己の内面と関わらざるを得ないという Death Education（死への準備教育）の特徴をあらわしている。ここで取り上げられた絵本は、葛藤を解消するため自己の外側や他者へ思考が向いているものは少なく、内省的な思考を行う主人公を描いたものが多い。人は何か未知の問題に出会うと、それが解決できない避けることができないものであればあるほど、自分の内面と向き合うことになる。神谷美恵子はこれについて次のように述べている<sup>(12)</sup>。

苦悩が人の心の上に及ぼす作用として一般に認められるのは、それが反省的思考を促すという事実である。苦しんでいるとき、精神的エネルギーの多くは行動により外部に発散されずに、精神の内側に逆流する傾向がある。そこにはさまざまな感情や願望の思考の渦がうまれ、人はそれに目を向けさせられ、そこで自己と対面する。人間が真にものを考えるようになるのも、自己にめざめるのも、苦悩を通してはじめて真剣に行われる。

本稿は幼児・児童の Death Education（死への準備教育）の目標に合わせて、それぞれの絵本を検討してきた。しかし、本来、絵本とは作り手によってのみ完成される芸術作品ではない。そこに読み手である子どもが存在してこそ成立する芸術作品である。本稿では、大人である筆者の視点を通して、幼児・児童を対象とした絵本を選択し、分析をしてきたが、真にこれが検証されるのは、子どもを目の前にした絵本の読み聞かせや、読書の場であると考えられる。例えば、読み聞かせでは「読み手」である大人により詞が音声として表わされ、子どもの「聞き手」はその言葉を耳で聞き、各場面の描かれた絵を目で見ながら、その世界に入り込んでいく。そうであるならば、本稿で選択された絵本が適切であるかどうかは、具体的な実践の場で検証されるべきであろう。今後、教育や医療の現場でこれらの絵本が活用されることを期待する。

#### 【引用文献】

- (1) 竹内隆 (2008) 『デスエデュケーションのすすめ』  
萌書房 p13
- (2) マーガレット・ワイルド文  
アン・スパッドピラス絵 (2001)  
『ジョニー・エンジェル』岩崎書店
- (3) 谷川俊太郎文, かるべめぐみ絵 (2011)  
『考える絵本シリーズ「死」』大月書店
- (4) ヘルメ・ハイネ文・絵 (2000)  
『ぞうのさんすう』あすなる書房
- (5) スーザン・バークレイ文・絵 (1997)  
『わすれられない おくりもの』評論社
- (6) ジョン・バーニガン文・絵 (2011)  
『おじいちゃん』ほるぷ出版
- (7) ディック・ブルーナー文・絵 (2008)  
『だいすきなおばあちゃん』福音館書店
- (8) ブライアン・メロニー文  
ロバート・イングペン絵 (2012)  
『いのちの時間一命の大切さをわかちあうために』  
新教出版社
- (9) ローリー・クラスニー・ブラウン文  
マーク・ブラウン絵 (2011)  
『「死」って、なに？ー考えよう命のたいせつさー』  
文溪堂
- (10) ミスカ・マイルズ文  
ピーター・パーノール絵 (1993)  
『アニーとおばあちゃん』あすなる書房
- (11) 佐々木宏子 (2001) 『絵本の心理学』  
新曜社 p46
- (12) 神谷美恵子 (1980) 『生きがいについて』  
みすず書房 p135

#### 【参考文献】

- ・アルフォンス・デーケン (2011)  
『新版 死とどうむきあうか』NHK 出版
- ・アルフォンス・デーケン・柳田邦夫編 (2010)  
『突然の死とグリーフケア』春秋社
- ・アルフォンス・デーケン編 (1994)  
『死を教える』メジカルフレンド社
- ・アルフォンス・デーケン編 (1997)  
『死を看取る』メジカルフレンド社
- ・鈴木穂波・香曾我部秀幸編 (2012)  
『絵本よむこと「絵本学」入門』翰林書房

- ・松岡享子 (1999)  
『えほんのせかい こどものせかい』  
日本エディタースクール出版部
- ・竹内隆 (2008)  
『デスエデュケーションのすすめ』萌書房
- ・佐々木宏子 (2001)  
『絵本の心理学』新曜社
- ・生田美秋・石井光恵・藤本朝巳編 (2013)  
『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房